



開会セレモニーのあと、出場する選手全員に集まってもらいました。400人を超える、大きな友情のかたまりです。「今までのすばらしい出会いと、尊敬し信頼できる仲間たちとの協力で、今の私とこの大会があります。子どもたちにも、すてきな出会いを通して、たくさんさんの仲間を作ってもらいたいです」と吉敷さん

ミニバス × 真剣勝負 = 交流 + α



小学生ということを感じさせない、スピード感あふれる動き

昨年十二月二十四日・二十五日に開催された第一回小江戸川越かわごえ籃球祭。小学生のミニバスケットボール（ミニバス）の大会に、市内はもとより、県内や長野県・新潟県から、男女合わせて二十四チームが参加しました。

「これまでは、市内の各チームが、それぞれで交流をしてきました。この大会は、これまでの交流を生かし、もっと大きなものへと広げていこうという主旨で企画しました。また、新潟県中越地震で被災したミニバス仲間を励ます意味で、新潟県のチームを招待しました」と実行委員長の吉敷賢一郎さん（37歳・久下戸）。

試合前、友好の証しにチームの色紙を交換。和やかなムードは、一礼をして試合が始まると一変しました。コート内を走り回り、体と体が

ぶつかり、激しいボールの奪い合い。コーチやチームの仲間、観覧席から見守る保護者からも大きな声が飛びます。コートの外では、普通の小学生の顔が、試合になると真剣な表情になり、機敏な動きに変わるのが印象的でした。

新潟県から参加した小千谷おぢやスーパーソニックスの監督・佐藤守さん（50歳）から、「川越のチームの皆さんには、新潟県中越地震の際に義援金を送っていただくなど、たくさん応援してもらいました。こうして川越に来て、さまざまチームと交流試合ができて、子どもたちも真剣勝負を楽しめたと思います」と伺いました。真剣勝負という交流を通じて生まれた友情。交流が広がるほど、友情の数も増え、子どもたちの大切な財産になっていくでしょう。



試合前に交換した色紙

試合終了後、対戦チームの前で一礼。礼儀正しい姿にすがすがしさを感じました



まちのできごと
川越市の面積は109.16km²

109パレット



ぎこちない動きも、徐々に滑らかにになりました

自然に体が動き出す？

1月8日、ジョイフルでアルゼンチンタンゴの無料講座が行われました。講師のリオス・フアンさんとパートナーの宮崎ロシータさんは、「子どもでも踊れる、いわばアルゼンチン版盆踊りです」。腰を離して顔を近づける姿勢に、参加した皆さんは少し恥ずかしそう。初めての方が半数以上でしたが、「こんなに気軽に踊れるなんて」と、早くも軽やかなステップを踏んでいました。



講師の模範演技

目標は「自分の心に勝つ」

ことして30回目を迎えた「川越市スポーツ少年団新春マラソン大会」。晴天に恵まれた1月15日、750人の小学生が川越運動公園内を駆け抜けました。各学年ごとに、友人や保護者の大きな歓声に包まれながら、必死に走る子どもたち。走り終えて、「前回より早く走れたよ」とお父さんやお母さんに話す、子どもたちの誇らしげな表情が印象的でした。



スタート直後の、激しい先頭争い



今後は、イベントなどにも利用する予定です

地域の皆さんと、ふれあい商店街

霞ヶ関北地区にある角栄商店街では、地域の皆さんとの結び付きを大切にしようと、昨年12月に「角栄ふれあいサロン」をオープンしました。無料休憩所として買い物客に開放するだけでなく、その壁面はギャラリーとして利用。同サロンのスタッフは、商店街各店の情報だけでなく、リフォーム相談などにも応じてくれます。「会話と買い物、両方楽しんでほしいですね」と同商店街振興組合理事長の大橋真行さん（62歳・霞ヶ関北4丁目）。

「これからのできる限り、剣道が続けていきたい」と渡邊さん。剣道の魅力を伺うと「若い人や男の人に勝てるのが気持ちいいし、楽しいから」。ほんとうに楽しそうに、笑顔で答えてくれました。

剣道に大切なのはまず基本。基本の型ができれば、バランスを崩すことはないそうです。次に気合い。男性にも負けない大きな声を出すことが、自分の気持ちも高めてくれます。試合では、相手の目を見て戦うことも重要。そうすることで、相手の動きをいち早く読むことができるそうです。



ことして剣道歴30年。竹刃を構える姿は、格すら感じさせます

「子どもが剣道を始めたから、自分もやってみよう」これが剣道との出会いでした。当時二十八歳、剣道が始める年齢として、早いとはいえません。その後、剣

渡邊幸子さん（68歳・上戸）

かわいさ
川越
びと
21